落書・歌句・小説になった バンク

らくがき

▼ミドリ十字 今にみておれ
ガソリンかけてもやしてやる
（二階便所）

▼人殺し!! バンク
（二階への階段）

▼バンクへ一度来れば二度三度……
死ぬまで行くのかと人は云い
（一階便所）

▼バンクつぶせ!!
（京橋駅の近く）

ちゅういがき

▼ご注意 飲酒されて来た方の受付ならびに採血はお断り致します ㈱ミドリ十字大阪プラント （二階待合室に前からある）

▼ご注意 となりのマンションの敷地内に野宿又は休息等の目的で立入る事を禁じます 若し注意された者の申し込みはお断りします 七五年六月五日 株式会社ミドリ十字 大阪プラント守衛室
（二階待合室とマンション入口）

《これにらくがき》何を言うか?! アンパン

▼お知らせ 七五年七月一日より受付は週一回と定め登録カードをチェックの結果日数（前回の受付日より七日以内の方）の早い方はお断りします
（二階待合室）

▼ご注意 構内でのトバク行為は堅くお断りいたします
（最新版、二階待合室）

▼お知らせ 採血部位が皮下出血のため赤くなる事がありますが労働には全く支障はありません
（検査室）

お知らせ 月曜日以外の日は比較的すいておりますので火曜日～金曜日のご利用をおすすめ致します
（二階待合室）

たんか はいく

☆いずれも、裸の会編『裸詩歌句集』（一九七〇）による。

▼けものめく印判押され囚のごと
番号呼ばれわれ売血す

▼施しを与えるごとき声音にて
札を数えるひとの手を見る

▼生死 様思い屈して
今日もまた京橋駅の人ごみを行く
――吉田 省

▼母乳はなる春待つ婦人の血を売りし

▼旬日に血を売るかゆで子の笑顔
――高 佳青

しょうせつ

☆さきごろ映画化されて話題をよんだ『青春の門』という五木寛之の小説に、売血のことが出てくる。主人公・伊吹信介が自分の体験をもとに小説を書くくだりだ。小説の中の小説の題名は「大学血笑記」。紹介しよう。

▼電介はあたりをうかがって、駅員が見ていないのをたしかめ、ホームの端から、ひょいと線路に飛びおりた。朝から何も食べていないので、やけに体が軽い。朝からどころか昨夜から絶食を続けている。といっても、限る

こわしているわけでも、食欲がすすまないわけでもない。極端な貧乏学生である竜介には、コッペパンを買う金さえなかったからである。

こうしてやってきたのは、もちろん金のためである。《中略》さて、どうしようと弱っている竜介に、同室の二十七、八歳の男が、耳よりな話をしてくれた。

「製薬会社へ行くんだな。一本夜ぎゃ六百円だ。兄ちゃんなら若いから二本ぐらい抜けるよ。ほら、ここに地図を書いてやるから行ってみな」

「抜くって、何を？」

「血、血を抜くのさ。おれもよく通ったもんだ。目白と、高田と、どっちがいいかな」

《中略》

そのエ場には、沢山の男たちが血を売りに集まっていた。男だけでなく、女もいた。どいつもこいつも、どこか青黒い悲惨な顔の色をしていた。最初の日、竜介が待合室に入って行くと、先に来て順番を待っている男たちが、一斉に竜介の顔を眺めた。そこに集っている連中は、どうやらこのエ場の売血の常連らしく、それぞれにふてぶてしい面構えで竜介を観察するように見た。

「はじめてかい」

と、無精ひげを生やした痩せた男が言った。

そうだ、と竜介は答えた。

「そんなら今日は登録だけだぜ」

その日は血液検査と登録だけで、次の回から血を抜いてくれる、というのである。竜介はがっかりして、泣きそうになった。そんな竜介を、一人の体格のいい青年が部屋の隅へ引っぱって行き、これを使いな、と一枚の登録カードを渡してくれた。《中略》「帰りがけにこのカードをおれに返して行くんだぜ。その時、カードの貸し賃二百円もたれずにな」《中略》どうやらその角刈りの男は、このエ場を縄張りにしているカード・やくざらしかった。その証拠に、彼のズボンの尻のポケットには、何十冊というカードが無造作にフ

つこまれているのが見える。

《中略》

採血室は畳合ににていた。左右の壁際にカイコ棚のような木のベッドが二段に並び、その上に男たちが寝て、片腕を通路の方へ突き出している。それぞれの腕から針をつきたてたゴム管がたれさがって、ガラスの容器につながっていた。

通路の方へつき出された手は、ゆっくりといそぎんちゃくのように開いたり握られたりなくりかえしている。竜介もベッドの下段に寝て、針を刺された。ぴゅっ、と赤黒い血がガラスのびんにほとばしった。それは呼吸するみたいに、ぴゅっ、ぴゅっ、と強く出たり弱く出たりする。血勢が弱まってくると、看護婦が、手の指をにぎったり開いたりするように命令した。竜介は頭を回して、通路につき出された数十本の腕を眺めた。音もなく、開いたり、とじられたりする掌は、それ自体が一個の触手のようでもあり、機械の一部分のような感じもした。

《中略》

そこへ集っている常連の間には、一種独特の連帯感があり、しかも、面白いことに、売血者同士の、気っ風、といおうか気質といおうか、そういった気風さえ存在したのである。そこに集っている連中は、ほとんどが職業的売血者、つまりプロの連中だった。ただ血を抜くことによって収入を得、それによって生活している男たちもいれば、また、中には他に仕事があるのにそれを放ったらかして、売血のためだけに売血をやる、つまり一種の売血癖のような人間もいた。

実際のところ、血を売る、という行為は、そこに得体の知れない魔力のようなものがあった。意ばれたる者の不安と焦燥、といったぜいなのである。《後略》（故浪漫、下）

☆このほかに、バンクのことを扱った作品（小説、記録、詩歌など）ありましたら教えて下さい。次の特集の時に、（係）